

「スーホの白い馬」内容と あらすじ・テスト対策ポイントを解説

「スーホの白い馬」の作者について

「スーホの白い馬」は、おおつか ゆうぞう さんが書いた絵本だよ。

もともと、モンゴルの人々の中から生まれ、かたりつたえられてきた「馬頭琴（ばとうきん）」というお話があったんだ。

それを、おおつかゆうぞうさんが、日本の子どもたちにわかりやすいように書き直したのが「スーホの白い馬」だよ。

おおつか ゆうぞうさんは、「長くつ下のピッピ」「小さなスプーンおばさん」などの外国のお話を日本語にして、書いているよ。

登場人物（とうじょうじんぶつ）

【スーホ】

このお話の主人公のひつじかいの少年。

年とったおばあさんとふたりきりで、まずしい暮らしをしていたよ。

ある日、白い子馬を見つけて、つれて帰ったよ。

【おばあさん】

年取ったおばあさん。スーホとふたりきりでくらしていたよ。

【ひつじかいたち】

スーホのなかまのひつじかいたち。

白馬にのってけい馬大会に出るよう、スーホにすすめたよ。



【白馬】

じめんに たおれていたところを、スーホに たすけられた白い馬。
とのさまの馬に されてしまったけれど、にげだして、スーホのところへ帰
ってきたよ。

【おおかみ】

ひつじたちをおそおうとした 大きなおおかみ。
白馬が、おおかみと たたかって ひつじたちを まもったよ。

【とのさま】

草原いったいを おさめている とのさま。
けい馬大会で 一等になったものは、とのさまのむすめと けっこんさせる
と言ったけれど、一等になった スーホを おいはらい、白馬を 自分のも
のにしたよ。

【家来（けらい）たち】

とのさまの 家来たち。とのさまの めいれいに したがって、スーホに
とびかかったり、白馬に 矢をはなったりしたよ。

あらすじ

スーホの白い馬

作：おおつか ゆうぞう 絵：リー＝リーシアン

むかし、モンゴルの草原に スーホという まずしい ひつじかいの少年が
いました。

ある日、スーホは 生まれたばかりの 白い子馬が たおれているのを 見
つけ、つれて帰りました。

スーホは 心をこめて 子馬のせわをし、子馬は すくすくと そだちまし
た。



あるばん、おおかみが ひつじたちを おそいにきました。
白馬は ひっして ひつじたちを まもりました。
スーホは ひつじを まもってくれた白馬を 兄弟のように思い、「ありがとう。どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と 話しかけました。

ある年の春、一等になったものは とのさまのおすすめと けっこんできるといふ けい馬大会が ひらかれました。
白馬にのって 出場したスーホは、一等になりました。
ところが、一等が まずしいひつじかいと知った とのさまは、スーホをおいはらい、白馬を 自分のものに しました。
白馬をとられた スーホは、かなしみがきえず、白馬のことばかり 考えていました。

白馬を じまんしたい とのさまは、白馬にのるところを みんなに見せようとなりました。
とのさまが 白馬にまたがると、白馬は おそろしい いきおいてはねあがり、にげ出しました。
おこったとのさまは、白馬をころせと 家来に めいれいしました。
矢がつぎつぎと ささりましたが、白馬は 走りつづけました。

そのばん、スーホとおばあさんは 外で 音がすることに 気づきました。
すると、そこには 白馬がいました。
白馬は ひどいきずを うけながらも、大すきな スーホのところへ 帰ってきたのです。
ところが つぎの日、弱りはてた白馬は、しにました。

かなしさとくさしさで ねむれなかったスーホでしたが、あるばん、白馬のゆめを 見ました。
それは、白馬が 自分の体をつかって、がっきを作ってほしいと話す ゆめでした。



ゆめからさめた スーホは、すぐに がっきを作りました。
これが、馬頭琴（ばとうきん） というがっきです。
スーホは 馬頭琴をひくたびに、白馬との思い出を 思い出し、すぐそばに
白馬がいるような 気がしました。
やがて、馬頭琴は モンゴルの 草原中に広まり、ひつじかいたちは その
美しい音に つかれをわすれるのでした。

「スーホの白い馬」内容とポイント

「スーホの白い馬」の場面分けごとに、内容とポイントを かくにんしよう。

場面は、「ばしょ」や「とうじょうじんぶつ」、「じかん」などが かわったところをヒントにして 考えるといいよ。（「スーホの白い馬」の場面分けは、先生や学校によって かわる可能性（かのうせい）があるよ。）

登場人物の セリフやこうどうから、「登場人物が どんな気もちだったか」を 考えてみよう。

だいの ばめん 馬頭琴という がっきのしょうかい

だいのばめんは、「中国の北の方」から「こんな話があるのです。」のところまで。

【ばしょ】モンゴル

【ないよう】馬頭琴 というがっきが しょうかい されているよ。

「スーホの白い馬」は、モンゴルという 外国のお話だね。



モンゴルは どんない国かという、中国の北の方にあつて、広い草原が 広がっているんだね。

モンゴルの人々は、ひつじや牛や馬などを かつて、くらしていたんだね。

しぜんゆたかで、どうぶつたちが のびのびすごしている けしきが おもいうかぶね。

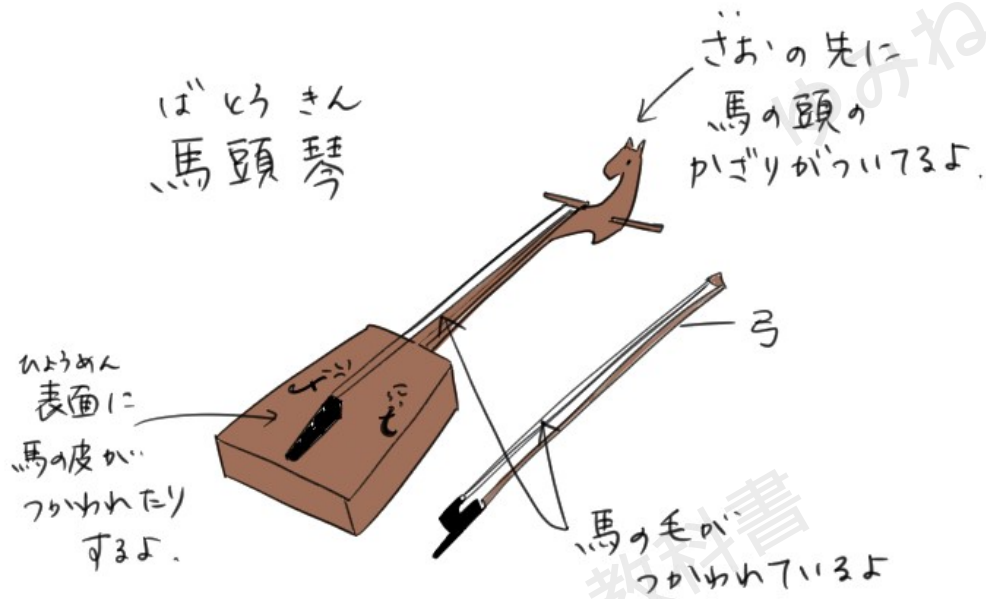


ちずで見ると、モンゴルは 中国の上で ロシアの下にあるね。日本ともうみをはさんで けっこうちかいね。

そんなモンゴルには 「馬頭琴」という がっきが あるんだね。どんながっきかという、がっきの いちばん上が 馬の頭の形を しているんだね。

お話の下に かかっている絵を見ると、たしかに 馬の頭の形をしているね。





だい1の ばめんのさいごは、「どうして、こういうがっきができたのでしょ
う。それには、こんな話があるのです。」と書いてあるね。

「こんな話」とは、どんな話なんだろう？
それが つぎのばめんから しょうかいされているよ。

つまり、「スーホの白い馬」は、「馬頭琴 というがっきが できたりゆ
う」をしょうかいしている話 なんだね。

だい1の ばめんは、お話がはじまるまえの、かんたんなしょうかいだね。
どんなお話が はじまるのか、おしえてくれているよ。

だい2の ばめん スーホが 白馬をつれてかえってくるよ

だい2の ばめんは、「むかし、モンゴルの草原に」から、「月日はとぶよ
うにすぎていきました。」のところまで。長いから、少しずつ かくにんし
よう。



【じかん】むかし

【ばしょ】モンゴルの草原

【ないよう】スーホが 白い馬を見つけて、つれて帰ったよ。スーホと白馬は 兄弟のように たすけあうようになったよ。

スーホのしょうかい

【じかん】むかし

【ばしょ】モンゴルの草原

むかし、モンゴルの草原に、スーホという 少年がいたね。
どんな少年かという、まずしいひつじかいて、年とったおばあさんと ふたりきりで くらしていたね。

スーホは、おとなにまけなくらい、よくはたらいたね。
なぜかという、おばあさんをたすけるため じゃないかな。

おばあさんは、年をとっているから、きっと体力も おとろえているよね。
だから スーホは「おばあさんに おりをさせないように、自分がはたらこう！」という 気もちだったのかもしれないね。
スーホは まじめで、やさしいね。

それから、スーホは 歌が とてもうまいね。
どのくらいうまいかという、ほかのひつじかいたちに たのまれて、よく歌を 歌った くらいだね。
やさしくて 歌もうまいスーホは、ほかのひつじかいたちとも なかがよく、かわいがられていたことを そうぞうできるね。



スーホが 白馬を つれて帰る

【じかん】ある日のこと

ある日のこと、日はしずみ、あたりは どんどん くらくなってくるのに、スーホは 帰ってこなかったね。

おばあさんは、しんぱいになり、ひつじかいたちも、どうしたのだろう、と さわぎはじめたね。

なぜかという「スーホやひつじたちに 何かあったのかな？」と 思ったからだね。

スーホは、何か白いものを だきかかえて、帰ってきたね。

「何か白いもの」とは、生まれたばかりの、小さな白い馬 だったね。

スーホは、にこにこしながら、わけを話したね。

「わけ」とは、子馬をつれて帰ってきたりゆう のことだね。

子馬をつれて帰った りゆうは、「白い馬が じめんにたおれて、もがいていたけれど、もちぬしや おかあさん馬もいない。夜になったら、おおかみに 食べられてしまうかもしれない。」と 思ったからだね。

スーホは、ひとりぼっちで たおれていた 子馬が しんぱいだったんだね。

スーホが「にこにこ」していたのは どうしてかな？

きっと、「子馬のおせわができるなんて、うれしいな」「かわいい子馬と いっしょにくらせるなんて、うれしいな」という 気もちだったんじゃないかな。

「だきかかえて」という こうどうから、子馬のことを かわいがっていることが わかるね。



子馬は すくすくとそだったね。

なぜかというと、スーホが、心をこめて せわをしたからだね。

「心をこめて」とは、「かわいい子馬が 元気にそだちますように」と あいじょういっぱい、やさしく ていねいに せわをしたということだね。

子馬は、雪のように白く、きりっと引きしまって、だれでも、思わず 見とれるほどになったね。

「見とれる」とは、心をひきよせられて、うっとりとながめることだよ。

つまり、子馬は スーホのせわのおかげで、だれもがうっとりするほど、うつくしくて たくましい馬に せいちょうしたんだね。

白馬が ひつじたちを おおかみから まもる

【じかん】あるばんのこと

あるばんのこと、ねむっていたスーホは、はっと目をさましたね。

なぜかというと、けたたましい馬の鳴き声と、ひつじのさわぎが 聞こえたからだね。

スーホは、はねおきると、外にとび出し、ひつじのかこいのそばに かけつけたね。

「はねおきる」「とび出す」「かけつける」という こうどうから、スーホがとても いそいでいることが わかるね。

なぜかというと、「白馬やひつじたちに 何かあったのかもしれない。」と しんぱいで たまらなかったからだね。

すると 大きなおおかみが、ひつじに とびかかろうとしていたね。



そして わかい白馬が おおかみの前に 立ちふさがって、ひっしに ふせいでいたね。

つまり、白馬は おおかみに食べられないように、ひつじたちを まもっていたんだね。

白馬は 体中あせびっしりだったね。
なぜかという、ずいぶん長い間、おおかみと たたかっていたからだね。

自分も おおかみに やられてしまうかも しれないのに、どうして白馬はひつじたちを まもってくれたのかな？

白馬にとって、スーホは 自分をひろって そだててくれた おんじん（力になって、そだててくれた人のこと）だよな。
きっと「スーホ、ほんとうにありがとう」と思っているよね。

だから 白馬は「ひつじが食べられたら、スーホが かなしむだろうな。しごともなくって こまるだろうな。こんどは、ぼくが たすけてくれたスーホのやくに立つ番だ！」と 思ったんじゃないかな。

スーホは おおかみをおいはらって、白馬のそばに かけよったね。
そして、白馬の体をなでながら、兄弟に 言うように「よくやってくれたね、白馬。本当にありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と話しかけたね。

どうして、スーホは、兄弟に言うように 話したのかな。

きっと、スーホは、かわいがって そだてた白馬が たくましくせいちょうし、自分のために 命がけてがんばってくれたことに かんどうしたんじゃないかな。

本当の兄弟のように たすけあえたり、おたがいの気もちを わかり合えたりする、こころづよさを かんじたんだね。



だから「どんなときでも、いっしょだよ」と言ったんだね。

「かけよった」「なでながら」という こうどうからも、スーホが 白馬のことを とてもだいに 思っていることがわかるね。

スーホが 白馬をかわいがる いっぽうてきな あいじょうではなく、白馬も スーホを だいに思っていたんだね。白馬が ひつじをまもったばめんで、二人のきずなが さらにふかまった かんじがするね。

だい3の ばめん 白馬が とのさまに とられる

だい3の ばめんは、「ある年の春」から「どうなったのでしょうか。」のところまで。

長いから、少しずつ かくにんしよう。

【じかん】ある年の春

【ばしょ】けい馬大会

【ないよう】スーホは けい馬大会で 一等になったけれど、とのさまに白い馬を うばわれたよ。

スーホは けい馬大会で 一等になる

【じかん】ある年の春

ある年の春、知らせが つたわってきたね。

どんな知らせかというと、「とのさまが けい馬の大会をひらく」「一等になったものは、とのさまのおすすめと けっこんさせる」という知らせだね。

「このあたりをおさめているとのさま」とは、草原いったいを しはいしている 力のあるえらい人 ということだね。

「けい馬」とは、人が馬にのって どれだけ早く 馬を走らせることができるかを きょうそうする ことだよ。



なかまの ひつじかいたちは、スーホに けい馬に出るよう おすすめたね。

とのさまのおすすめと けっこんしたら、ゆうふくなくらしが できるよね。
だから ひつじかいたちは、まずしいスーホに しあわせになってほしいと
思って、すすめたのかもしれないね。
それに、うつくしくたくましい白馬なら きっとかてると 思ったんじゃないかな。

スーホは、けい馬に出ることにしたね。

けい馬大会では、たくましいわかものたちが いっせいにおちをふり、馬は
とぶようにかけたね。
どうして おちをふるかというと、けい馬では「はやく走ってね」という
合図をするために、馬に おちをふるんだ。

「たくましいわかもの」「馬はとぶようにかけた」というようすから、みんな
しんげんに しょうぶをしている ことがわかるね。

でも、一等になったのは、スーホの白馬 だったね。
どうして スーホは 一等に なれたのかな？

スーホと白馬は 兄弟のような つよいきずなが あったよね。
だから、「白馬よろしくね」という スーホの気持ちと、「スーホのために
がんばりたい」という 白馬の気持ちが 一つになっていたんじゃないかな。

二人の気持ちが 一つになっていたから、だれよりも 早く走れたんだね。

とのさまは「白い馬ののり手を つれてまいれ。」とさけんだね。
きっと、「どんなすばらしいわかものを おこにできるのだろう」と 楽しみ
だったんじゃないかな。



スーホは とのさまに 白馬をとられる

ところが、とのさまは、スーホを見ると、おすめのおこにする というやくそくを 知らんぷりしたね。

なぜかという、スーホが まずしいみなりの ひつじかい だったからだね。

きっと「おかねもちで 力のある とのさまと、まずしいひつじかいでは がちが ちがう。まずしいみなりの人を おこにするなんて とんでもない。」と思ったんじゃないかな。

とのさまは お金があるかどうかや 見た目で 人のかちを きめていて、かちのないと思ったスーホには やくそくをやぶったね。

とのさまは「おまえには、ぎんかを 三まいくれてやる。その白い馬をここにおいて、さっさと帰れ。」と言ったね。

ぎんかとは、お金のことだね。

なぜかという、とのさまは「スーホは いらないけれど、一等になった うつくしいすばらしい馬は 自分のものにしたい。お金をやれば、まずしい ひつじかいは まんぞくするだろう。」と思ったからだね。

スーホは、かっとなって、「馬を売りに来たのではありません。」とむちゅうで 言いかえしたね。

「かっとなって」は おこったということだね。

スーホは まずしいから、お金をもらえたら たすかるよね。

でも、どうして スーホは おこったのかな？

それは とのさまが だいじな白馬を 自分のものにしようと したからだね。



みんなは、お金をわたすから 家族や友達をよこせ と言われたら、どう思うかな？

とても いやな気持ちになるし、家族や友達を売ることなんて できないよね。

だいじな兄弟である白馬を お金とひきかえに うばおうとしていることにおこったんだね。

「むちゅうで」という ことばから、とのさまにさからったら ひどい目にあうかもしれない ということは考えずに 思ったことを まっすぐ つたえたことがわかるね。

とのさまは「なんだと、ただのひつじかいが、このわしにさからうのか。ものども、こいつをうちのめせ。」とどなり立てたね。

とのさまは スーホが 自分の思いどおりにならないから、おこったんだね。

いばっていて、自分かってだよね。

スーホは、おおぜいになぐられ、けとばされて、気をうしなったね。

とのさまは、白馬をとり上げると、大いばりで 帰っていったね。

スーホは、きずやあざだらけ だったけれど、おばあさんの 手当てのおかげで 何日かたつと やっとなおったね。

でも 白馬を とられたかなしみは、どうしてもきえなかったね。

「だいじな兄弟をうしなってしまった。」「白馬にもう会えないかもしれない…」と かなしい気持ちで いっぱいだったんだね。

「白馬はどうしているだろうと、スーホは、そればかり考えていた」というようすから、スーホは、はなれていても ずっと白馬のことを 思っていることがわかるね。



スーホの体のきずはなおったけれど、心のきずは きえなかったんだね。

だい4の ばめん 白馬は スーホのところへ にげかえってきたけれど、しんでしまう

だい4の ばめんは、「すばらしい馬を手に入れたとのさまは」から、「しんでしまいました。」のところまで。
長いから、少しずつ かくにんしよう。

【じかん】ある日のこと

【ないよう】白馬は スーホのところへ にげかえってきたけれど、しんでしまったよ。

白馬が とのさまのところから にげる

とのさまは、まったくいい気もちで 白馬を 見せびらかしたくて たまらなかつたね。

「まったくいい気もち」とは、とてもごきげん ということだね。

なぜ白馬を 見せびらかしたいのかというと、「すばらしい馬をもっている自分は すごい！」と じまんしたかったからだね。

白馬のことを、スーホは「兄弟」、とのさまは「自分のすごさを あらわすもの」と思っているね。スーホは だい1の ばめんて たすけるために 白馬をつれて帰ったけれど、とのさまは 自分のために、白馬を 手にいれたんだね。

ある日のこと、とのさまは おきやくを たくさんよんで、さかもり（おさけをのんで楽しむパーティ）をしたね。

そして、みんなに 見せてやろうと、白馬にまたがったね。



すると、白馬は おそろしいいきおいで はね上がったね。
とのさまは じめんにころげおちたね。

白馬は、とのさまの手から たづなを ふりはなすと、風のように かけ出したね。
つまり、白馬は とのさまを おとして、にげただね。

きっと、「スーホに会いたい」「スーホにらんぼうする人と いっしょにいたくない」という 気持ちだったんじゃないかな。
「そのときです」という 一文から 白馬が にげるチャンスを まっていたかんじがするね。

とのさまは 「早く、あいつをつかまえろ。つかまらないなら、弓で いころしてしまえ。」と どなりちらしたね。
白馬のことを すばらしい馬だと思っていたのに、自分にさからったとたん「あいつ」とよんだり、「ころせ」と言ったりして、いっしゅんで たいどをかえたね。

自分の思いどおりに いかないものは「ころせ」だなんて、とてもらんぼうだし、やっぱり 白馬のことを「もの」だと思っているよね。

家来たちは いっせいに 矢をはなったね。
白馬のせには、つぎつぎに、矢がささったね。

「つぎつぎと」ということは、矢が何本も たくさんささった ということだね。
矢がたくさんささったら、いたいし、くるしいから、ふつうなら たおれてしまうはずだよね。
それでも、白馬は 走りつづけたね。

なぜかというと、「スーホに会いたい」からだね。
その つよい気持ちだけで、白馬は 走りつづけたんだね。



白馬が スーホのところへ かえってくる

【じかん】 そのばんのこと

スーホが ねようとしていると、外の方で 音がしたね。
どんな音かというと、「カタカタ、カタカタ」という音だね。

ようすを見に行った おばあさんは、「白馬だよ。うちの白馬だよ。」と
さけび声を 上げたね。
おばあさんは 白馬がいたから おどろいたんだね。

スーホは はねおきて、かけていったね。
びっくりして うれしくて いそいで 白馬のところへ 行ったんだね。

でも、やっと会えた白馬は 矢が何本も つきささり、あせが たきのように
に ながれおちていたね。

「矢が何本も つきささり」ということは、命にかかわる ひどいきずだよ
ね。

「たきのように」とは、ドバドバと 止まることなく、あせが ながれつづ
けている ということだね。

白馬は、ひどいきずをうけながら、走って、走って、走りつづけて、大すき
なスーホの ところへ 帰ってきたね。

「走って、走って、走りつづけて」ということは、くるしくても 一ども休
まずに、ずっと 走ってきたんだね。

なぜかというと、「スーホに会いたい」と つよくねがっていたからだね。

スーホは、はを 食いしばりながら、矢をぬいたね。
なぜかというと、「だいじな白馬が こうげきされて、くやしい」「ひどい
目に合わせて ごめんね」という気もち だったんじゃないかな。



それから スーホは、「白馬、ぼくの白馬、しなないでおくれ。」と言ったね。

きっと 「やっと会えたのに、たいせつな兄弟を うしなうなんてつらい」という 気もちだったよね。

でも、白馬は いきは、だんだん細くなり、目の光もきえていったね。そして、白馬は しんでしまったね。

だい5のばめん スーホが 馬頭琴を作る

だい5の ばめんは、「かなしさとくやしきで」から「聞く人の心をゆりうごかすのでした。」のところまで。

【じかん】あるばん

【ないよう】ゆめに出てきた 白馬が 教えてくれたとおりに、スーホは がっきを作ったよ。

スーホは 白馬のゆめを 見る

かなしさとくやしきで、スーホは、いくばんも（「なん日も」のこと）ねむれなかったね。

ねることができないほど、「白馬がしんだかなしき」や「白馬をころされたくやしき」、「白馬をたすけられなかったくやしき」などで むねがいっぱいだったんだね。

それに、だい4のばめん「いきは、だんだん細くなり、目の光もきえて」いく白馬のようすを 見ていたから、しんでいく 白馬のすがたが どうしても わすれらなかつたのかもしれないね。



やっとあるばん、ねむりこんだとき スーホは 白馬のゆめを 見たね。
どんなゆめかというと、スーホがなでると、白馬が、体をすりよせて、やさしくスーホに話しかける ゆめだね。

白馬が 話しかけたのは、つぎのことばだね。

「そんなにかなしまないでください。それより、わたしのほねやかわや、すじや毛をつかって、がっきを作ってください。そうすれば、わたしは、いつまでもあなたのそばにいられますから。」

白馬は、自分の体で がっきを作ってほしいと スーホにおねがいたんだね。

なぜかというと、がっきになれば「いつまでも スーホのそばに いられる」からだね。

「しんでしまったけれど、心はいつもそばにいるよ」という 気もちだったんじゃないかな。

だいの、白馬が おおかみから ひつじたちを まもってくれた ばめんで、スーホは白馬に「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と言ったよね。

白馬は このやくそくを だいにしておぼえていて、しんでしまっても やくそくをはたそうと してくれたんだね。

スーホと白馬は、会えなくなってしまうとおたがいに 「いつまでもいっしょにいたい」と 同じ気もちで いたんだね。

スーホは がっきを作る

【じかん】ゆめからさめると

ゆめからさめると、スーホは すぐ そのがっきを 作りはじめたね。
むちゅうで 組み立てていったね。



「そのがっき」とは、白馬が教えてくれた、白馬の ほねや かわや すじや毛を つかって、作るがっきのことだね。

なぜかという、がっきを作れば 白馬と いっしょにいられるからだね。「すぐ」「むちゅうで」という ことばから、スーホが「早く白馬に会いたい!」と 思っていることが わかるね。

かなしさとかやさしさで いっぱいだったスーホにとって「白馬といっしょにいられる」ことが、「生きるきぼう」になったんだね。

がっきは できあがったね。
これが 馬頭琴というんだね。

つまり、だいの ばめんで しょうかいされた「馬頭琴」は、スーホが白馬の体を つかって作った がっきなんだね。

馬頭琴は、スーホと白馬の ふかいきずなから 生まれたんだね。

スーホは、どこへ行くときも、馬頭琴を もっていったね。
なぜかという、「どんなときでも、白馬といっしょにいたい」と 思っていたからだね。

スーホは、馬頭琴を ひくたびに、白馬を ころされたくやさしさや、白馬にのって 草原をかけ回った 楽しさを 思い出したね。
そして、スーホは 自分のすぐわきに、白馬がいるような気がしたね。

なぜかという、白馬は しんでしまったけれど、馬頭琴という がっきにすがたをかえて、スーホのそばに よりそってくれていたからだね。
スーホと白馬は、会えなくても 心はつながっていたんだね。

そんなとき、がっきの音は、ますますうつくしくひびき、聞く人の心を ゆりうごかしたね。



「そんなとき」とは、スーホが 白馬のことを 思い出したり、すぐわきに 白馬がいるような 気がしたりしたとき だね。

どうして、スーホがひく 馬頭琴は、聞く人の心を ゆりうごかしたのかな？

きっと、音にこめられた スーホの気もちが、聞く人の心に とどいたから じゃないかな。

どんな気もちが こめられていたかという、スーホは 白馬との楽しい思い出や ぐやしい思い出を 思い出していたよね。

お話ぜんたいを ふりかえってみると、白馬との思い出には、悲しいこと、つらいこと、うれしいこと、心づよいことなども あったよね。

おたがいを思う、あたたかい気もちも あったよね。

スーホが 白馬を思う いろいろな気もちが 音にこめられ、がっきになった 白馬も その思いに よりそってくれていたから、聞く人それぞれの気もちやじょうきょうによって 同じ気もちになったり、気づくものがあったりして、心にぐっとひびいたんじゃないかな。

だい6の ばめん 馬頭琴は モンゴルの草原中に 広まった

たい6のばめんは、「やがて」から「一日のつかれをわすれるのでした。」のところまで。

【じかん】 やがて

【ばしょ】 モンゴルの草原中

【ないよう】 馬頭琴が モンゴルの草原中に 広まったよ。

やがて、馬頭琴は、広いモンゴルの草原中に広まったね。



なぜかという、スーホのかなでる音が 聞く人の心を ゆりうごかしたから、とてもすてきながっきだと 広まっていったのかもしれないね。

そして、ひつじかいたちは 夕方になると、よりあつまって、馬頭琴の うつくしい音に耳をすまし、一日のつかれを わすれたね。

スーホと白馬の きずなから うまれた馬頭琴は、ひつじかいたちを いやすがっきとして、あいされつづけたんだね。

さいごに、このお話を ふりかえってみよう。

スーホと白馬は、「どんなときも、いっしょだよ」という つよいきずなでむすばれていたよね。

だから、とのさまに はなればなれにされてしまっても、おたがいのことを ずっと思っていたよね。

白馬は しんでしまったけれど、馬頭琴に すがたをかえて、スーホと白馬は いっしょにすることができたね。

そして、二人のきずなから 生まれた馬頭琴は、ひつじかいたちに あいされたね。

きっと、作者は このお話をとおして わたしたちに「はなればなれになっても、たとえしんでしまっても、おたがいを 思い合うことは とてもすばらしいこと」「おたがいを思う つよいきずなは たとえはなればなれになっても、けっして なくなるものではないこと」をつたえたかったんじゃないかな。



ことばの意味

「スーホの白い馬」に 出てくる ことばの意味を しょうかいするよ。
 ※「スーホの白い馬」の中で つかわれている 意味なので ちゅういして ね。

ことば	意味
モンゴル	中国と ロシアの となりにある 国
草原	草に おおわれて、木が ほとんどない ばしょのこと
馬頭琴	モンゴルに つたわっている がっき。「げん」と「弓」に 馬の毛が つかわれている。 「さお(もつところ)」の さきっぽが 馬の頭のかたち になっている
まずしい	あまり お金がなくて くるしい せいかつを していること
ひつじかい	ひつじを かって、せわをするのが しごとの人のこと
心をこめて	あいてのことを おもって、たいせつに ていねいに すること
すくすく	いきおいよく のびたり、元気よく せいちょう すること
見とれる	うつくしさ などに、こころを うばわれて うっとり 見ること
けたたましい	びっくりするような、するどい 高い音
はねおきる	はねるようにして いきおいよく おきること
立ちふさがる	前に立って、行くのを じゃまして とめること
ふせぐ	さえぎって とめること
いったい	そのあたり ぜんたいのこと
おさめる	王さまやリーダーとして、国を まとめること
けい馬	人をのせた馬が はしって、はやさを きそう スポーツ
すすめる	人によいと思うものを するように さそうこと
またがる	またを ひらいて 馬にのること
たくましい	体が がっしりして、カブよい ようす
いっせい	ぜんいんが そろって おなじタイミングで すること
むち	馬を たたいて 走らせるための ほそながい ぼう
みなり	ふくそうのこと
知らんぷり	知らないように ふるまうこと
かっとなる	頭に血が のぼって れいせいに なれない ようす
さからう	はんこう すること。いうことを きかないこと
うちのめす	あいてが おきあがれないほど はげしく なくること



ことば	意味
どなり立てる	おおごえで たくさん どなること
つきっきり	ずっと そばに ついていること
さかもり	おさけをのんで たのしむこと
さいちゆう	ちょうど なにかを している ときのこと
いころす	いった矢を あてて ころすこと
弓を引きしぼる	弓に 矢を セットして、げんを じゅぶん に 引くこと (まさに 矢を いる まえ ということ)
矢をはなつ	矢を いること
うなりを立てて	まるで うなっているような 低い音を たてること
ふいに	とくに おもいも しない ようす
はを食いしばる	ぐっと 力をいれることで、上と下の はが つよく かみしめられている ようす
弱りはてる	とても 弱っていること
いくばん	いくつかの ばん
心をゆりうごかす	かんでうして 心が うごかされること
よりあつまる	たくさんの人が 1つのばしょに あつまること

「スーホの白い馬」でならう新しい漢字

「スーホの白い馬」で あたらしく ならう漢字を しょうかいするよ。

漢字	読み方
北	音読み:ホク 訓読み:きた
牛	音読み:ギユウ 訓読み:うし
引	音読み:イン 訓読み:ひ(く)
売	音読み:バイ 訓読み:う(る)
弱	音読み:ジャク 訓読み:よわ(い)

